

<図書紹介> 『奥琵琶湖「観音の里」の歴史』 (大東俊一著 彩流社 二〇一六年)

ITO, Naoki / 伊藤, 直樹

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

67

(終了ページ / End Page)

67

(発行年 / Year)

2018-03-20

【図書紹介】

『奥琵琶湖「観音の里」の歴史』

(大東俊一著 彩流社 二〇一六年)

伊藤 直樹

大東俊一氏は二〇一六年に御逝去された。本書は氏の遺著である。大東氏は本誌『法政哲学』創刊のさいの「会誌検討委員会」の委員長であった。本誌の創刊は、大東氏の辣腕がなかったら、もっと先になってしまったであろうと思われる。銘記したい。

本書『奥琵琶湖「観音の里」の歴史』は、大東氏が上梓されてきた「宗教思想三部作」とも呼ぶべき、一連の著作の第三作めである。これらは次のものからなる。

『日本人の他界観の構造』二〇〇九年、彩流社

『日本人の聖地のかたち 熊野・京都・東北』

二〇一四年、彩流社

『奥琵琶湖「観音の里」の歴史』二〇一六年、彩流社

これらの著作で大東氏が目指していたことは第一作『他界観の構造』に明らかである。「他界観が道教・仏教・儒教などの外来の宗教思想を受容・変容しながら時代を通して形成されてきた、その形成のロジックの構造を検討しようとする」(四頁) ことにある。そして第二作では、それが

熊野や京都の「六地藏めぐり」など、日本の「聖地」と呼ばれる場所で、どのようになされているかを明らかにする。

そして第三作となる本書では、そうした受容と形成がひとつの場所に焦点を当てて実証考察される。それは、琵琶湖北に位置する「観音の里」と呼ばれる、現在の滋賀県長浜市高月地区である。この地には、十一面観音菩薩をはじめとする数多くの仏像があることで知られている。本書では、記紀に渡来人として登場するアミノヒボコや仏教の伝来の経緯、そして「観音の里」の形成、そして五穀豊穡を祈る伝統行事である「オコナイ」が取り上げられ、「観音の里」の宗教的な豊かさが、生き生きと記される。

大東氏が、これらの宗教思想を考察するなかで必須のものとする視点が二つある。ひとつは、宗教的な精神風土が道教・仏教・儒教そして土着の信仰などの混合のなかで受容形成されたことである。そしてもうひとつは、それらに貫かれていた、人々の「大いなるもの」に対する尊崇の念である。そしてこれは、大東氏自身を支えるものであったかもしれない。氏はあとがきで、病床のなか、本書が「完成に漕ぎつけることができたのは、まさに「大いなるもの」に守られていたからかもしれない」と記されている。

私たちが宗教的なもの、「大いなるもの」に思索を試みるとき、この大東氏の仕事をひとつの糧としたい。